

# 弥生住居の想定復元

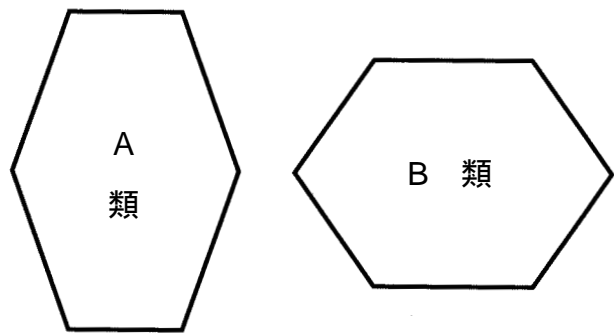
久田 正弘

## 1. はじめに

近年、北陸地方では弥生時代中期の調査や報告書刊行が多くみられ、遺構・土器・石器・木製品などのデータが蓄積されてきたが、まだまだ資料不足な感は否めない。その中でも、遺構に関しては明治以降の圃場整備事業などの影響により攪乱・削平がなされた為に、集落の全体像のみならず1つの建物さえも、復元出来ない調査も多い。よって、今回は壊されている弥生住居を報告書の記述などを元に想定復元してみたい。たとえば住居と報告されているが柱配置が不明確な例や、連続する土坑や不連続な土坑が連なる例などを外周溝と想定して、その内側に柱配置が確認されるのかを検討してみたい。なお多角形の柱配置では、縦長の配置をA類、横長の配置をB類(第1図、宮川ほか2004)とする。

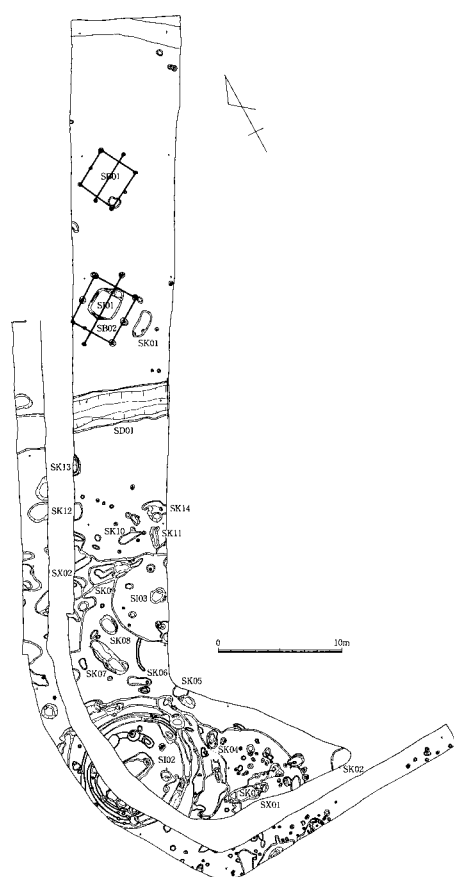
## 2. 白山市野本遺跡の復元例

石川県白山(旧松任)市野本遺跡の弥生住居の想定復元を試みたい。4次の発掘調査が行われ、1次(木立ほか1993)・3次(金山2002)・2次(前田1995)・4次(金山2002)は近接しており、関連がある遺構が検出され、八日市地方7~10期の土器が出土し、主体は9・10期と思われる。1・3次調査区(第2図左)ではSD01より北側に2棟の棟持柱建物(SB01・02)が報告された。SB02の内側にはSI01(後期)、東側1mにはSK01(後期中葉)があり、両者とも関連ある遺構と把握された。一連の遺構(第2図右)と考えると楕円形の周溝(推定内寸8.3×5.7m、推定外寸10.4×6.8m)を持ち、B類の柱配置(6.4×3.7m)をもつ竪穴住居とみることも可能である。その理由としては、報告書の記述と、金沢市戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡では掘立柱建物40棟が報告(出越2002)されたが、棟持柱建物が存在しないことを参考にした。しかし、加茂遺跡では中期後半の可能性がある棟持柱建物(松尾ほか2005)があり、田嶋明人・林大智氏からは棟持柱建物は後期には存在すること、桁行きが2間であること、柱の規模から棟持柱建物と認識すべきと指摘を受けた。

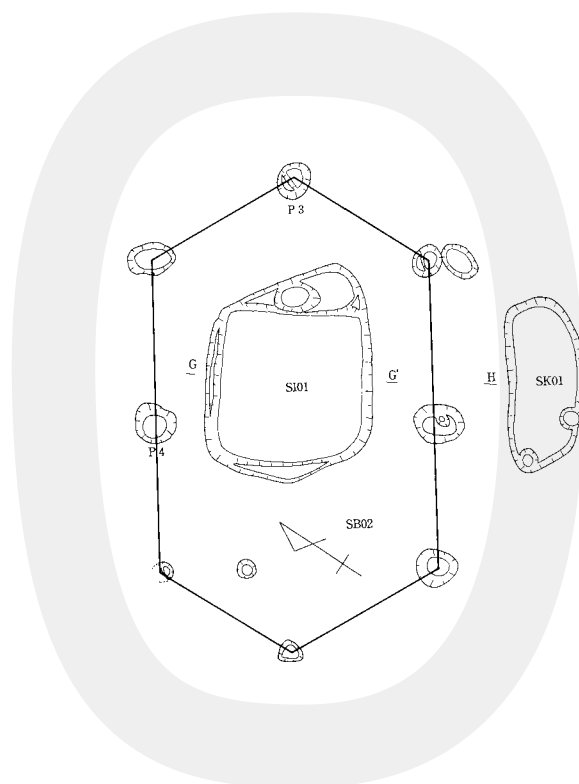


第1図 多角形柱配置の分類

次に第3次SI02・03、SX01(第3図)を検討したい。SI03は多角形の竪穴住居(八日市地方9期)であり、周辺には墓坑と思われる土坑があり、竪穴住居との関連が指摘された。その指摘などを元に第3図左下を想定した。多角形の竪穴住居に楕円形の周溝が伴い、周溝はSK06・07・10が繋がる幅の狭い可能性とSK05(後期)・07などを含んだ幅広い周溝の可能性もあろう。竪穴と周溝も北東方向に主軸を持つ可能性があり、正六角形の柱配置がA類の短いタイプと思われる。SI02は楕円形の竪穴住居(八日市地方10期、安2004)で建替えがあり、柱は方形配置・六角形配置が想定(第3図右上)された。1・3次調査の距離は国家座標を利用していないので正確な位置関係ではないが、竪穴・周溝とも楕円形である。よって、正六角形配置で未調査区内に柱を想定するよりも1次調査区まで延長



3 次全体図 ( 1 / 600 )

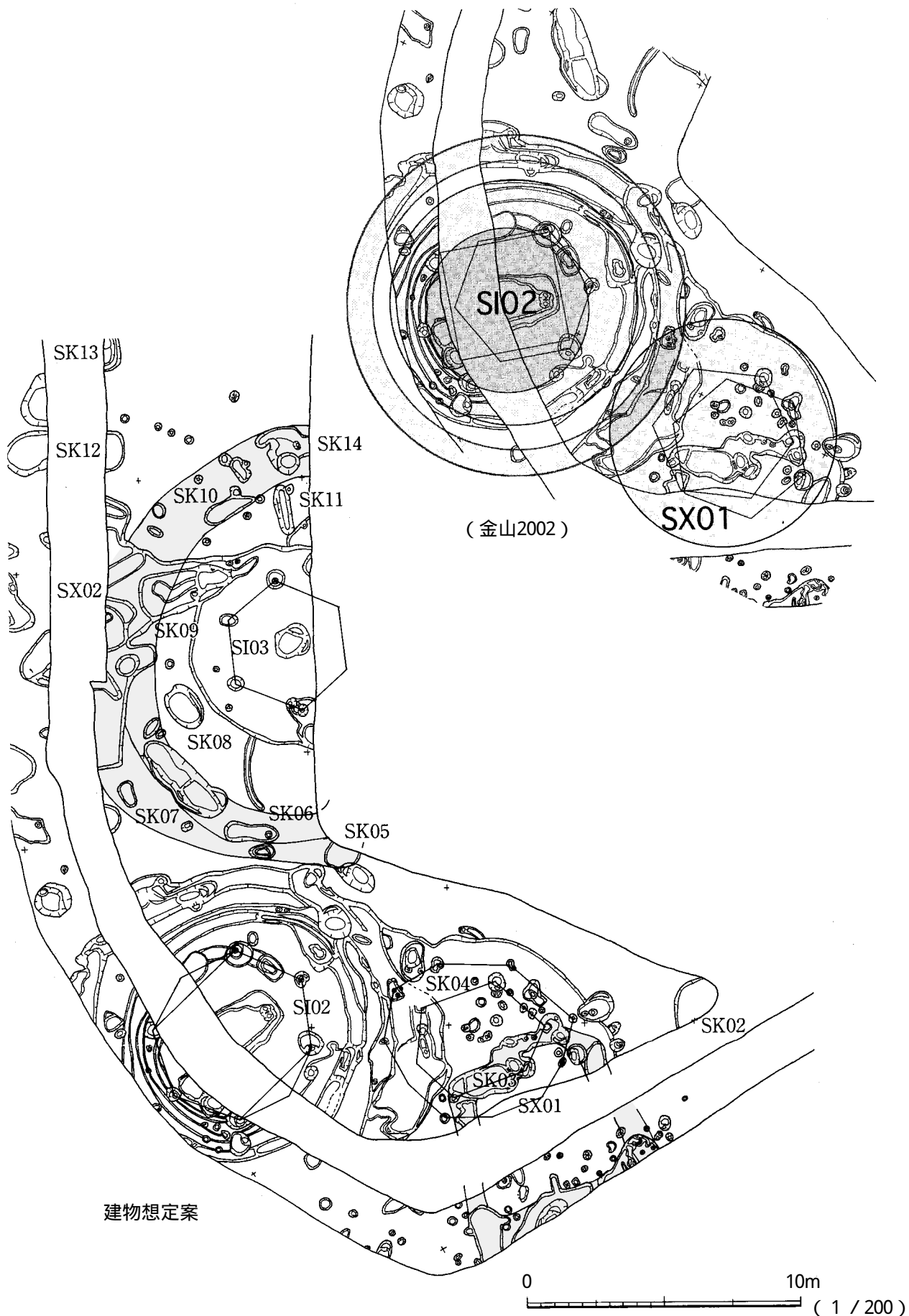


0 5 m ( 1 / 100 )

第 2 図 野本遺跡の弥生住居 1

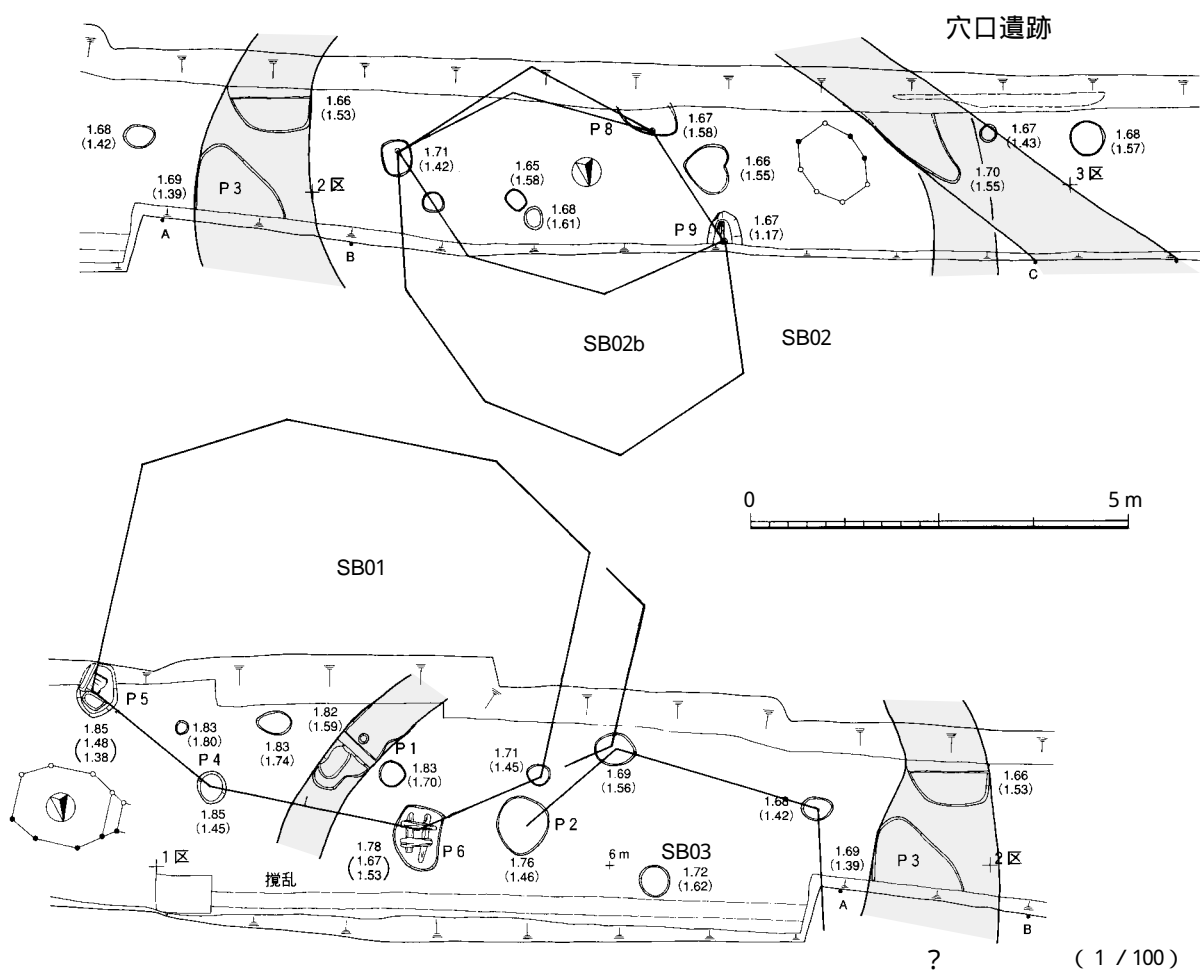
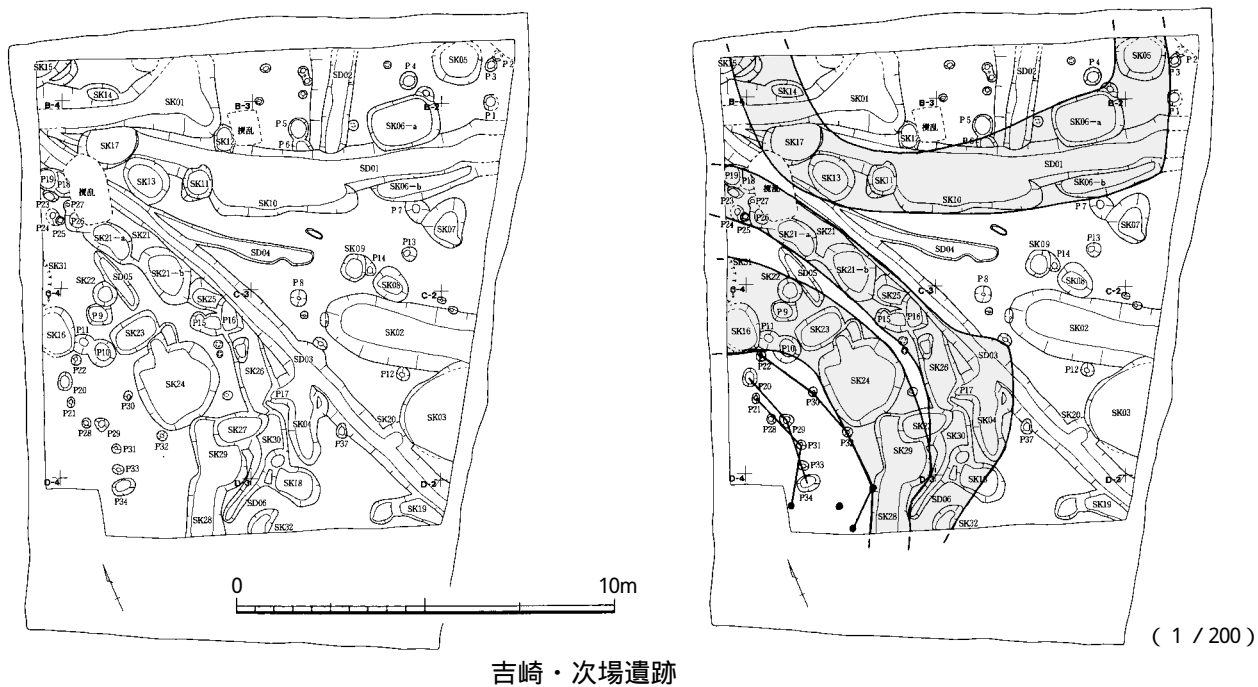
して六角形 (6.3×4.6m、桁行は1か2間、2間はSB02を参考)と八角形 (6.3×6m)のB類を想定してみたい。SX01は楕円形の竪穴住居(八日市地方9期)であり、正六角形の支柱配置で建替えが想定されたが、検討の結果、東西方向に長軸を持つ六角形 (4.9×3.5m)のB類を想定し、外側にも多角形の柱を想定した。しかし、支柱穴の数からは建替えが想定可能であるが、2棟目を明確に想定出来なかったので筆者の復元に問題が多いからであろう。他にSK03と1次調査区の溝群とで周溝も想定可能なのかもしれない。

2・4次調査(第4図上段)では、墓坑・墓坑と想定される土坑(前田1995第35図)があり、4次調査では浅い溝群の連結(第4図中段)を平地式建物か竪穴住居の外周溝と想定されたが、調査区が狭いためと支柱穴が確認されないで躊躇(金山2002)された。2次調査区では1棟の竪穴住居と1棟の小型竪穴住居が検出されたが、小型竪穴住居(SI02)は誤認も想定(前田1995)された。SI01(八日市地方8期)は多角形の支柱配置が数例想定可能であり、北側と西側には直線的な周溝が存在(第4図下段)する。2次調査区の北側にも周溝が想定可能であるが、調査区の制約から指摘のみに留める。また、南西側には4次調査区に続く周溝が想定可能であるが、厳密な距離関係や柱穴の深さが確認出来ないの、竪穴住居の可能性を指摘するに留める。



第3図 野本遺跡の弥生住居 2





第5図 能登地方の弥生住居

### 3．羽咋市吉崎・次場遺跡の復元例

石川県羽咋市吉崎・次場遺跡の第16次調査区の弥生住居の想定復元を試みたい。第5図左上が全体図であり、主柱穴(P20・29・34)と連結土坑群(P19・23～SK26～SK32、内径10m前後)が住居(八日市地方7期)であり、もう1つの柱穴群と連結土坑群の存在が指摘(宮下1998)された。第5図右上のは報告書の写真から推定復元した柱穴であり、主柱穴付近には別の多角形配置の柱穴列があり、主柱穴の外側にも多角形の柱配置が想定される。その外側にはSK34・16～SK24～SK28があり、周溝と想定可能である。よって、2つの柱穴列・周溝は建替えの可能性と、主柱穴と内外の周溝による幅広の周堤帯を支える柱穴列の可能性も想定される。また、第5図右上側にも土坑が不連続に隅円方形に巡る可能性がある。

### 4．志賀町穴口遺跡の復元例

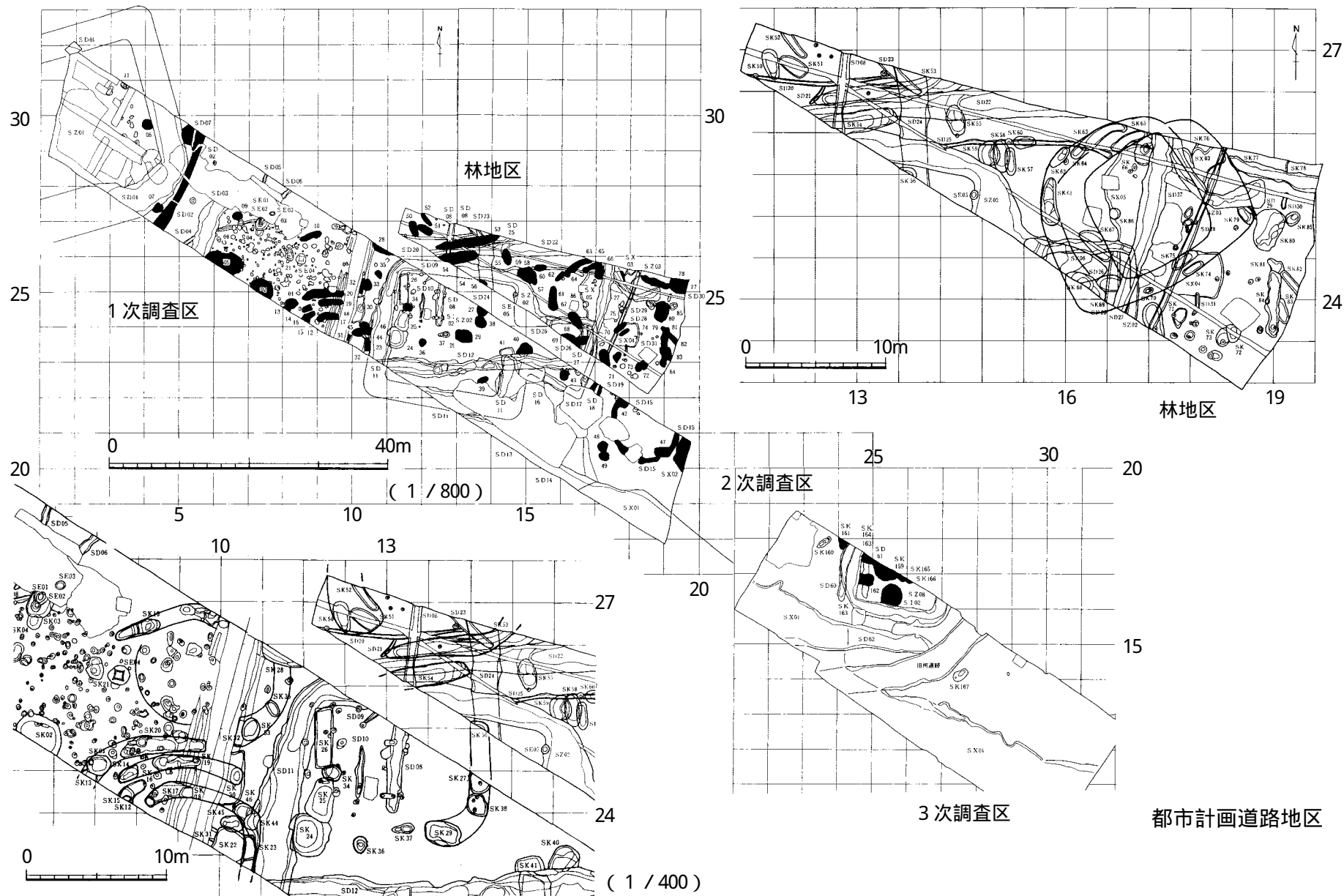
石川県羽咋郡志賀町穴口遺跡B区(第5図下)では、調査時には礎板や柱根の存在から住居を認識していたが、幅2mの調査区なので復元を成し得なかった。報告書作成時に東的場タケノハナ遺跡(宮川ほか2004)・猫橋遺跡(久田ほか2004)の例を参考にして、筆者が後期の建物2棟(八角形の柱配置、A類)を復元し、他の住居の存在も想定(宮川・久田ほか2004)した。SB01の入り口の柱を想定した柱穴は、P2と柱穴とで多角形配置の柱穴列(A類)を想定すれば、溝・土坑・P3を周溝と想定することも可能(SB03)である。またSB02と溝の距離は2mであるが、土坑・P3との距離は0.5～0.8mと近すぎるので、P3などは西側の溝(3区)と一連の遺構(SB02の周溝)の可能性が高いと思われる。しかし、B類を想定すれば土坑・P3との距離が短いのは問題ないのかもしれない。しかし、SB01と03は重なっていることから、時間差が想定される。SB02はSB01例を参考に八角形(A類、5×3.8m)を復元したが、一般的な六角形(SB02b、B類、4.5×2.3m)も想定可能であるが、梁行きの幅が狭すぎるので報告書案の方が無難と思われる。

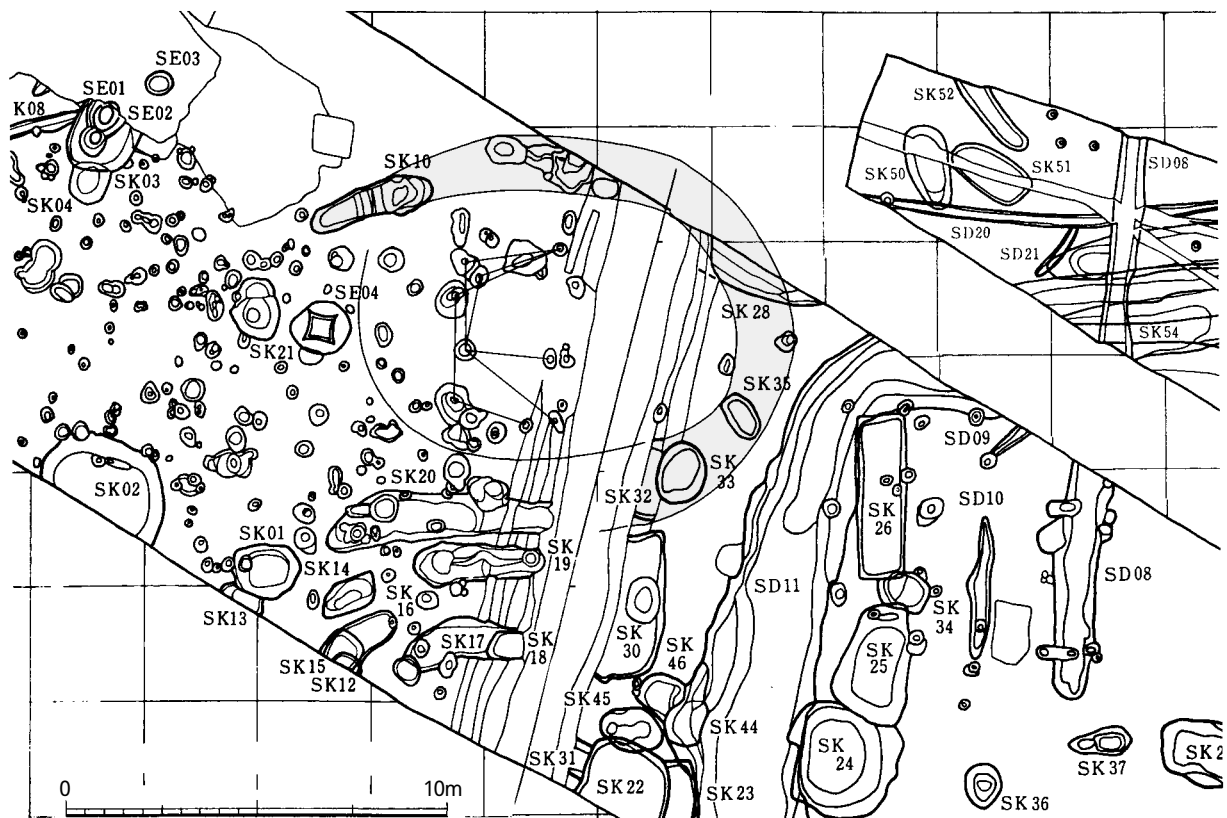
### 5．高岡市石塚遺跡の復元例

富山県高岡市石塚遺跡は弥生時代中期の遺構が多く調査され、土坑は土坑墓の可能性が提示(山口1992)されて以降、多くの地区が墓域(岡田ほか2001、藤田2003)と認識された。しかし、方形周溝墓以外は土坑が集中しているだけであり、土坑の床面や土層には木棺の痕跡は確認されていないので、土坑群を周溝と仮定して弥生住居を想定復元してみたい。石塚遺跡は和田川から西側に別れた五十玉用水から、北西方向に分かれた上北島用水を境にして南北に大きく分かれるようである(第10図下側)。北集落には東から都市計画道路・きぼう・老子地区などがあり、南集落には東から窪田・日本海ホーム・宮崎地区、67・68・71年調査区などがある。

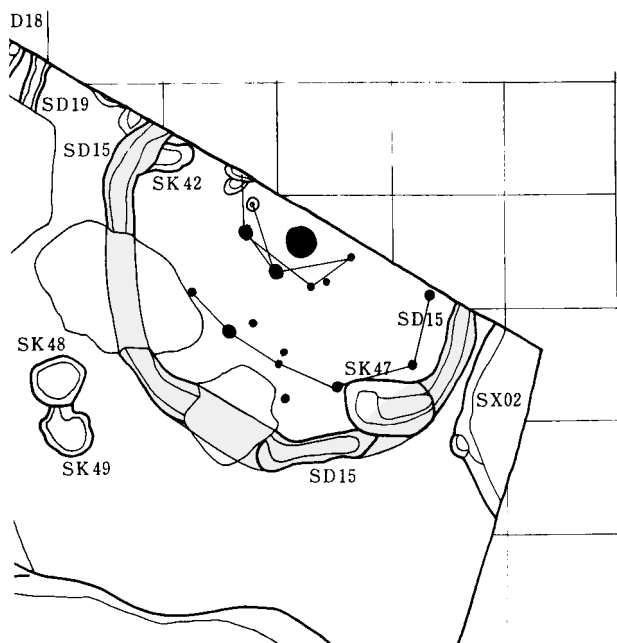
まず、北集落を検討してみたい。都市計画道路地区(第6図)では3次の調査(山口1987・1988、岡田ほか2001)と林地区(山口1992)が行われ、八日市地方9・10期が主体である。都市計画道路地区は北西方向に伸びる大きな鞍部に沿った微高地に立地し、古墳・中世・攪乱により多くの遺構が影響を受けている。第6図中央は概要報告での記述を元に弥生中期の遺構を黒塗りにしたものであり、1・2次調査区の境(第6図右下)では北側には土坑群が周溝状に巡り、南側には3条の周溝が想定可能である。またSK06・02は周溝の入り口部の可能性が想定されよう。2次調査区東側に位置する周溝状の遺構群(SD15など)は住居の可能性が想定される。他に2次調査区と林地区の境には隅円方形の周溝(内寸9.5×9.5m)と、林地区西端の北側にも周溝が想定可能であるが、不明確である。林地区東側では多くの土坑が隅円方形の周溝状に巡る可能性(第6図左上)があり、周溝は2条と思

第6図 石塚遺跡の弥生住居 1





都市計画道路地区



SD15全形（南西から）



( 1 / 200 )

( 黒塗りは筆者が写真から想定復元 )

第7図 石塚遺跡の弥生住居2

われ、周溝内寸10×10mと10×9.5mと想定される。周溝はほぼ10mの隅円方形の周溝が造り替えられた可能が想定される。しかし、周溝内では4角形や多角形配置の柱穴列は想定しがたいので、住居としては否定的要素もあるが、造り替えが想定可能なので方形周溝墓の可能性は低いと思われる。3次調査区壁付近には土坑などが周溝状（岡田ほか2001）に巡る可能性もあり、周辺出土土器には一部古い土器が出土している。

次に、住居の可能性のある遺構群を検討してみたい。第7図上段はSK10・28・35・33・32が楕円形に巡る可能性があり、その内側には一段低く（山口1987図版三上）なっている。低い部分の内側には、多角形配置の柱穴列（大きな柱穴列=4.5×4m、小さな柱穴列3つ=4.6×5.3×4.4m）が想定可能であり、その外側にも柱穴列が存在する可能性もあろう。しかし、低い部分は攪乱とみることも当然であり、中世の井戸（SE04）に伴う掘立柱建物の柱穴の可能性もある。本来は中世の掘立柱建物を復元してから、弥生住居の柱配置を検討すべきであるが、概報の記述だけでは筆者には無理であった。次にSD15は、北西方向に主軸（推定9.4m）を持つ楕円形である。内側（第7図右下）には灰穴炉と思われる土坑や多角形配置の柱穴列（3.6×3m）とSD15周辺にも多角形配置の柱穴列があるようにも見える（山口1988図版七下）。よって、住居に伴う遺構として推定復元したが、掘り下げられていないことから、攪乱の可能性も当然高い。

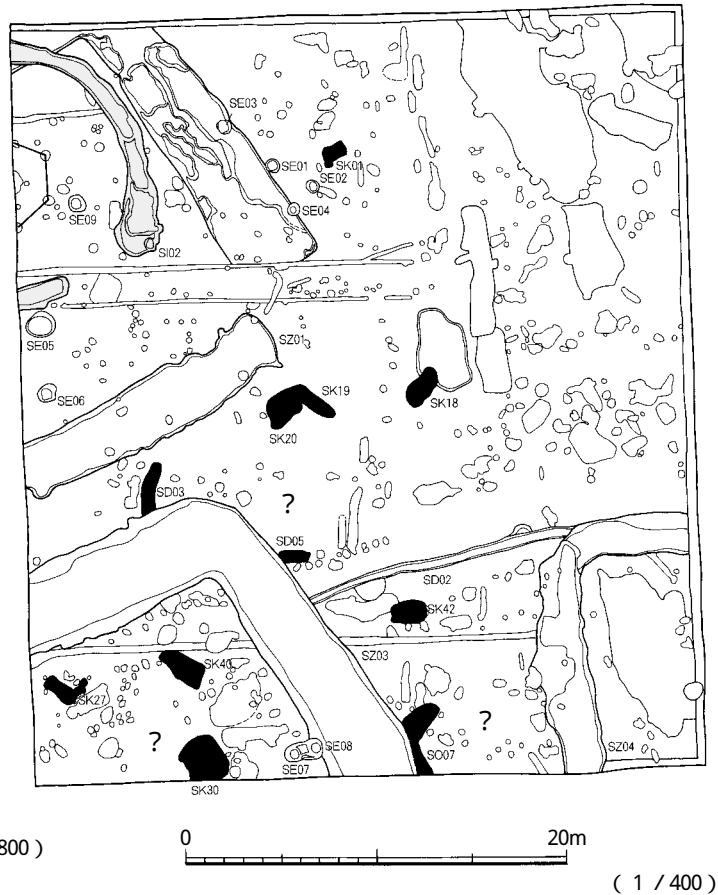
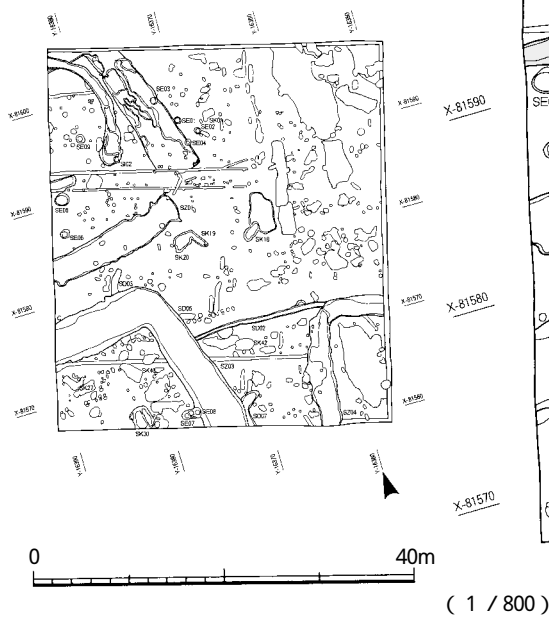
きぼう地区（第8図）は都市計画道路地区1次調査の北側に位置し、分布調査により3基の方墳が確認された（荒井2004）。発掘調査により弥生中期の周溝を持つ建物（SI02）が検出され、石塚遺跡における初めての住居址であり、高田地区の工房址SX07（第9図下）も含めて弥生時代の住居は稀である（藤田2003）という。SI02の周溝内は9.6×9.2m、多角形配置の柱穴列は3.6×2.8mが推定された。調査区には古墳群が存在し、中世の遺構や攪乱も多く、その影響と思われるが、中世の井戸は8基あるが掘立柱建物が報告されていない。第8図右側は概報の記述を元に弥生時代の遺構を黒塗したものである。SD07とSK18・20・30は土器の出土状態などから、土坑墓ではなく土器が廃棄された遺構と認識（藤田2003）され、従来の土坑認識とは異なっている。SK20はSK19と接しており、SD03・05を含めて楕円形の周溝を想定可能であり、またSD07の東側にも不連続な土坑が隅円方形に巡る可能性がある。その他にも、周溝状に巡る遺構群が想定可能であるが、概報の記述だけでは遺構の時期が特定されないので不明確なままである。遺構の時期は八日市地方9・10期主体であるが、若干の土器が古い可能性（八日市地方8期）が指摘された。

きぼう地区SZ04は周溝から中期の土器しか出土していないことや石塚古墳群の主軸と異なることから弥生中期後半の方形周溝墓とされた。しかし、一辺12m以上と推定される周溝墓は弥生中期としては規模が大き過ぎること、きぼう地区SZ02（14m）と規模が近いこと、2次調査SZ02・4次調査SZ04と方位が一致する可能性があること、周溝の幅が広い（1.8~2.6m）ことなどから、古墳（方墳？）と想定（第10図上）したい。また林地区にあるSZ03は方墳が想定（山口1992・岡田ほか2001）されているが、南東辺の中央部が開口していることやSK80などが撥形に開く位置に存在することから、小型の前方後方墳を想定してみたい。また規模や形状からは周溝を持つ建物を想定すべきであるが、古墳と同じ時期なので躊躇した。

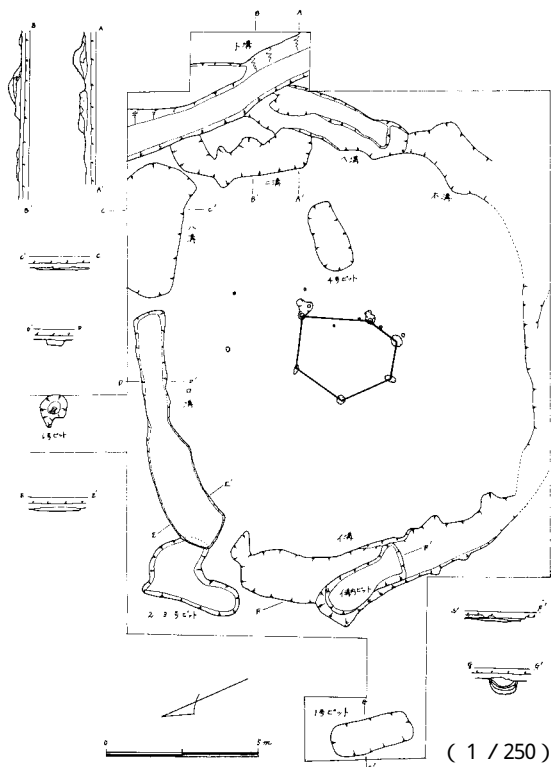
北集落の西側に位置する老子地区（第10図下）では東側に小さい鞍部と西側には土坑（山口1996b）があり、白石地区では弥生土器のみ出土（山口ほか1998）だが、高岡環状線地区まで弥生中期の遺構（荒井・山口1999）があるので、石塚遺跡が北西側に延びていることが確認され、時期は八日市地方9・10期が主体と思われる。

次に南集落を検討してみたい。南集落は石塚遺跡の主体的な地区であり、67・68・71調査では多く

## きぼう地区



## 68年調査区



第8図 石塚遺跡の弥生住居3

の遺構・土器が紹介（上野1974）された。68年調査地区（第8図下）では古墳の周溝に囲まれた柱穴群を弥生住居（周溝を持つ建物）と想定（久田1992）したが、時期・覆土の色が異なる（上野章氏教示）ようであり、岡本淳一郎氏も周溝を持つ建物と認定していない（岡本2006）。遺構の時期が異なるなら、2・3号ピットとイ号溝内ピットと6号ピットなどが周溝（内寸14m以上なので別の柱穴列が必要）になる可能性と、または古墳の周溝によって弥生住居の周溝が壊された可能性を想定したい。また71年調査区でも周溝が巡る可能性があり、住居と想定されるが、詳細は不明なので指摘のみとする。

窪田地区（山口1997）には大きな鞍部があり、福島地区東側（荒井1999）を巡って北集落東側の鞍部に繋がる可能性と上北島用水方向に繋がる可能性があり、また福島地区西側を巡って上北島用水に繋がる可能性と正和地区に伸びる可能性が想定（第10図下）されよう。その正和地区は鞍部（八日市地方7期）であり、石塚遺跡では谷部や窪地が入り組んでいたことが指摘

(山口1997)された。

宮崎地区(第9図上)はほぼ同時期の遺構であり、土坑墓と想定(荒井1997)された。東側では、不連続に続く土坑群(SK123・129・134・132)が周溝状に巡る可能性とSK130で北側に隅円方形に巡る可能性が指摘できる。また、西側では土坑(SK131・139～142)が楕円形に巡っており、SK139～142では土坑が2列の周溝状である。その内側には2mの間隔を置いて、多角形の柱配置が想定可能である。しかし、柱穴と想定されるピットの深さが記載されていないので、本当に支柱穴に成り得るのかは定かでは無い。

高田地区は北東側が低くなることが写真から伺え、鞍部近くに位置している。SX07(第9図下)が玉造工房とされ、7×5mの範囲が想定(山口1995)された。柱配置は五角形(4.7×4.3m)が2つとSK96を周溝と想定するか、SK96内の柱穴を使って六角形(B類、4.9×4.1m)を想定することが可能である。五角形の柱列から2.1m、SK96から0.8m、六角形の柱列から1.3mに方形周溝墓が存在する。方形周溝墓や土坑群が古く、SX07が新しいと想定された。北西側には土坑群があり、2条に巡る可能性があるので周溝と思われるが不明確である。

森田地区(第10図下)では方形周溝墓3基が検出され、SZ04の墳丘部から八日市地方6期の土器(下濱貴子氏教示)が墳丘部に食い込む形で出土し、方形周溝墓より以前の可能性が指摘(山口1993)された。安川2地区東側は縄文後・晩期の大鞍部(荒井1997)があり、南東側を弥生中期の鞍部(SX58)が切っており、SX58は森田地区東側の鞍部に繋がる可能性と、縄文の鞍部に沿って北上する可能性があろう。

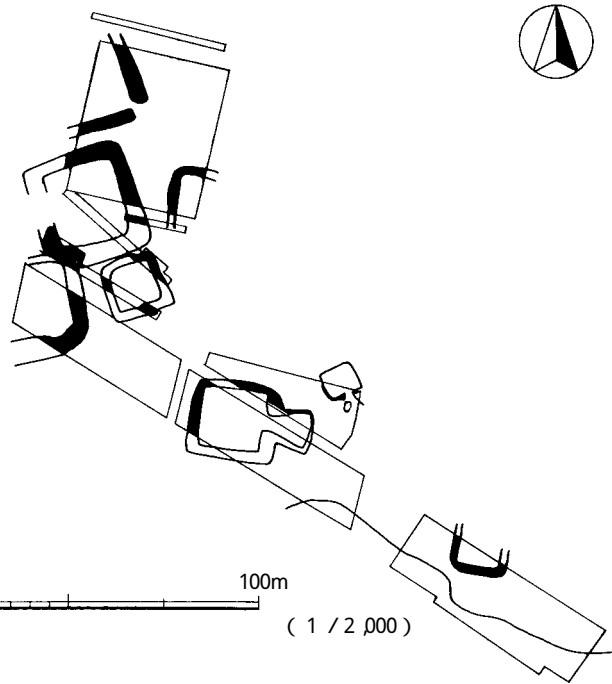
旭建設地区・日本海ホーム地区では遺構の多くが土坑(土坑墓の可能性)なのと、周辺には方形周溝墓や土坑墓が多く検出されたので、石塚遺跡の南側一帯が墓域(山口1996a)と位置付けられた。旭建設・日本海ホーム地区では八日市地方7期主体で若干古い土器が存在する可能性がある。東側に位置する旭建設地区の東側には鞍部があり、西側に位置する日本海ホーム地区では航空写真(写真2)から判断すると遺構ないし攪乱の染みが周溝状に見える部分为数箇所ある。周溝状の染みは攪乱の可能性も高く、また後世の削平により遺構が判然としないことから、想定自体が無理かもしれない。し



写真2 日本海ホーム地区全景



石塚古墳群全体図



石塚遺跡弥生遺構想定図



第10図 石塚遺跡の集落想定図

かしヒスイ製勾玉と未成品、玉造工具類が出土していることから、単なる墓域ではなくて集落域と想定したい。

上記の想定復元を元に石塚遺跡の弥生中期の遺構配置（第10図下）を検討してみたい。北集落では南と東側に大きな鞍部があり、それに沿った微高地に中期中葉（八日市地方8期）から土器が確認され、弥生中期後半の住居と周溝状遺構（住居？）が多く確認される。この微高地は古墳時代前期には前方後方墳・方墳による墓域（第10図上）となる。南集落の東側（窪田地区）に大きな鞍部があり、上北島用水に沿って北西側に繋がっていたと思われ、その南西側の微高地に南集落が立地する。南集落では中期中葉（八日市地方6～8期）を主体としており、住居は68年・高田・宮崎地区、周溝状遺構は高田・宮崎地区、住居想定遺構は71年・日本海ホーム地区に存在する。住居は上北島用水路付近（大鞍部）に沿った微高地上に北西方向に存在し、方形周溝墓は微高地内の小鞍部に沿って存在した可能性が指摘できる。

石塚遺跡は大きく2つの集落に分かれ、南集落が古く（八日市地方6期）鞍部周辺に方形周溝墓が存在し、森田地区では墓域を形成している。北集落は少し遅れて土器（八日市地方8期）が確認され、中期後半が主体であり、栗林式系土器と榎田型石斧（馬場2001）も伴うなどの相違点を指摘できる。しかし、調査地点や調査面積などを考慮して、2つの集落とも同時併存しており、中期中葉の主体は南集落にあり、中期後半の主体は北集落にあるとしておきたい。両集落とも大きな鞍部に挟まれた微高地に住居があり、方形周溝墓は微高地内の小鞍部近くに立地したようである。

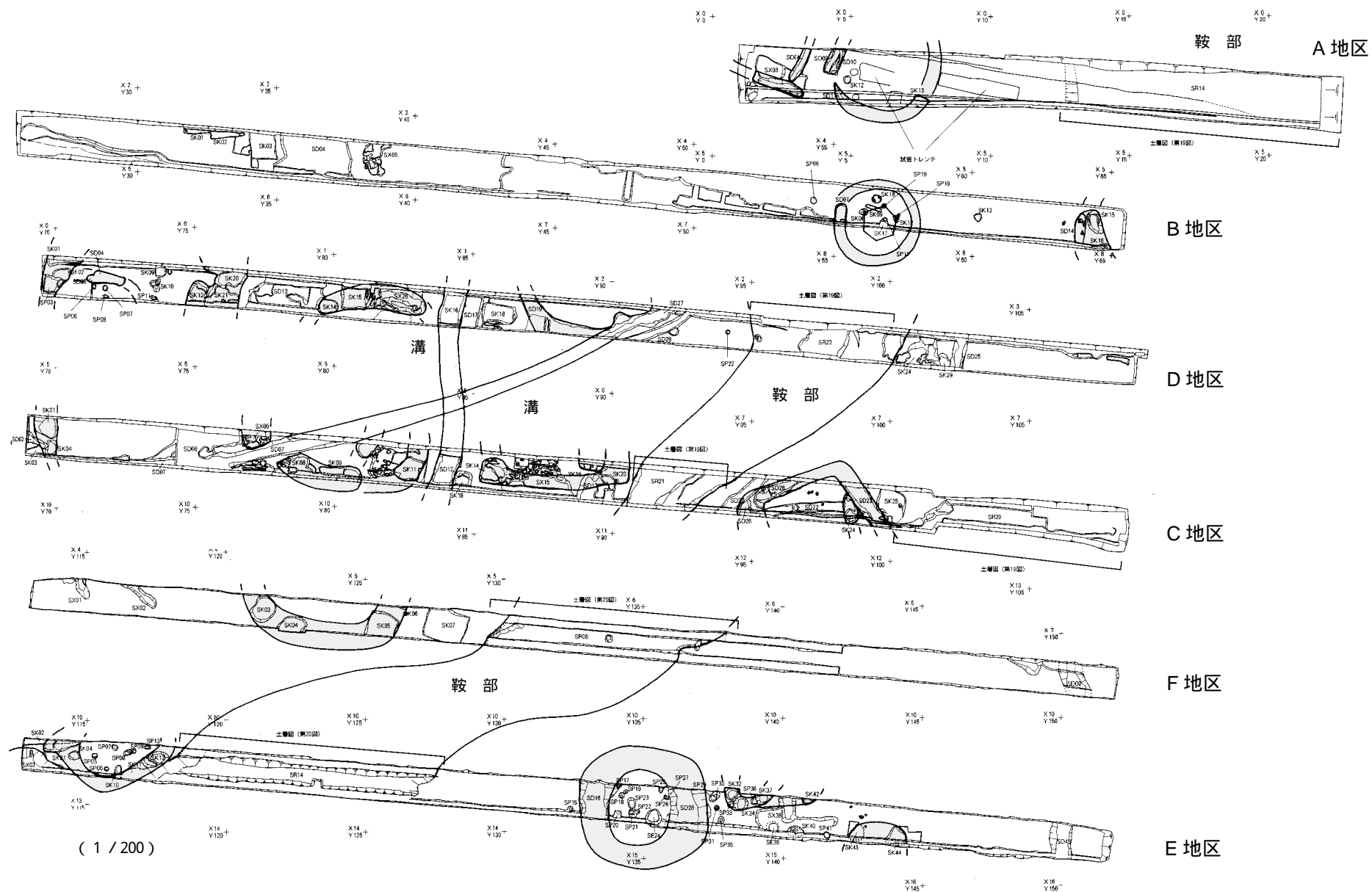
#### 6 射水市作道遺跡の復元例

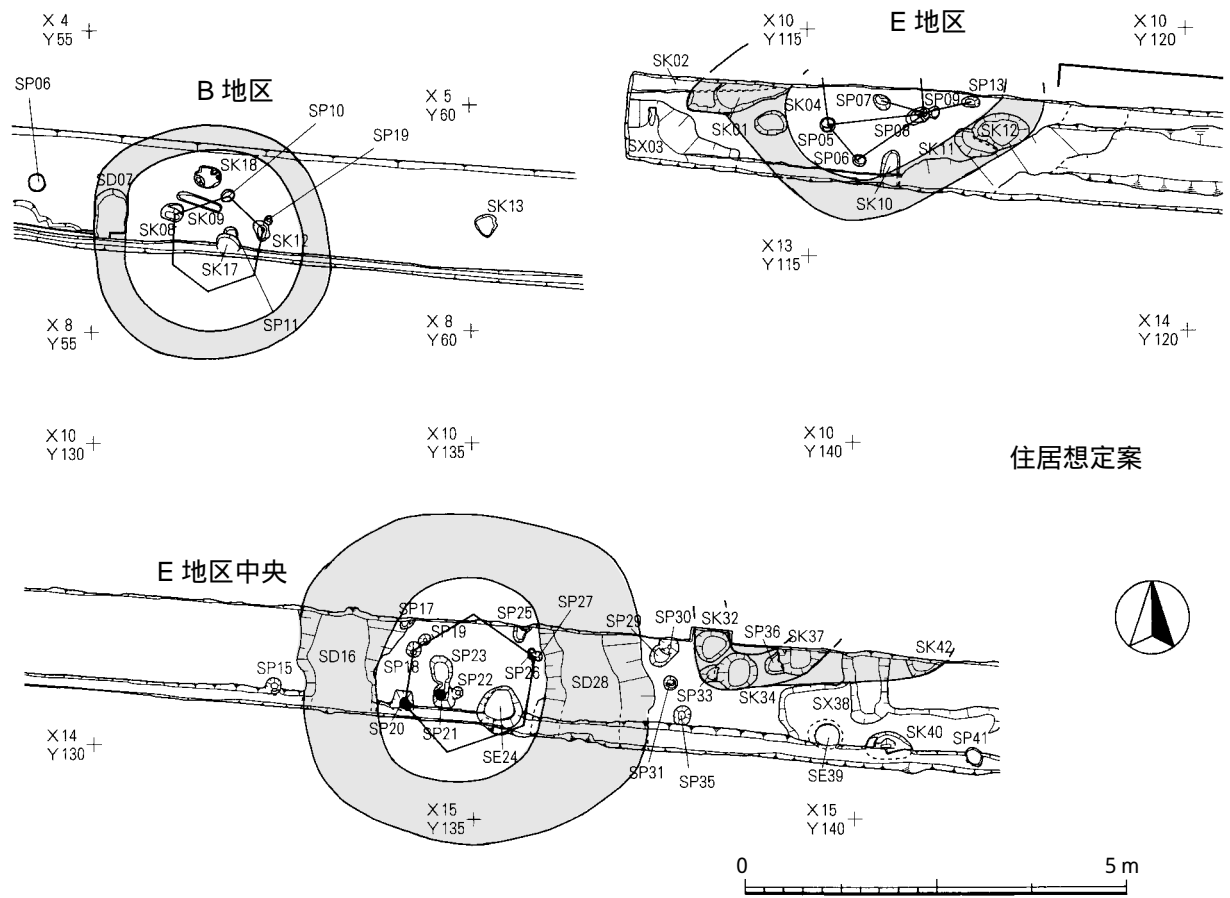
富山県射水（旧新湊）市作道遺跡（金三津など2006）を検討してみたい。幅3mの調査区なので遺構は全体を捉えられないが、遺構の時期は八日市地方遺跡8・9期である。報告書の記述を元に浅い土坑群などを周溝と想定すると10数箇所（第11図）があげられる。また、A地区西側とD区西端の周溝状遺構内には柱穴が確認されることから、住居の可能性が想定されるが、中世の遺構も存在するので定かではない。住居の可能性のある遺構群を第12図に提示した。B区東側ではSK17を灰穴炉とした六角形配置の柱穴列（推定2.6×2.4m）と周溝（SD07、推定内寸4.7m）が想定可能である。E地区西側では楕円形の周溝が想定可能であるが、内側には明確な柱配置を復元するには難しい。またE地区中央には円形に巡る幅広の周溝（幅4.2m）と内側には多角形配置の柱穴列（3.7×3.2m、B類か）が想定可能であるが、中世の井戸が接しているので柱穴も中世の可能性も高い。想定復元した遺構群の全体像は第12図下である。住居ないし周溝状遺構は14基あり、住居ないし方形周溝墓は2基がある。しかし、調査区幅が狭いことや遺構の深さ・時期などが不明確なので、周辺の調査や多くの方々の検討を待ちたい。

#### 7 大阪府の復元例

大阪府の事例として、2例を紹介したい。第13図左側は寝屋川市讃良郡条里遺跡であり、住居が4棟紹介（中尾2007）された。住居1の周りには土坑があり、性格は不明とされながら住居との関連性が高いとされた。今年3月大阪府立弥生博物館での展示を見学した際に、周溝が伴う可能性を認識した。住居1・2には土坑が周溝を持つ建物の可能性が高いことや、住居2と住居4の間には土坑が弧状に巡る可能性が指摘でき、住居5の存在を想定される。この認識は近畿弥生の会において東京都の及川良彦氏も同じ認識を示されており、荒唐無稽な想定でもないようである。柱配置も含めて、今後の報告を期待したい。第13図右側は寝屋川市八雲遺跡の第Ⅱ様式の住居（西口1987）である。土坑2

第11図 作道遺跡の弥生住居 1

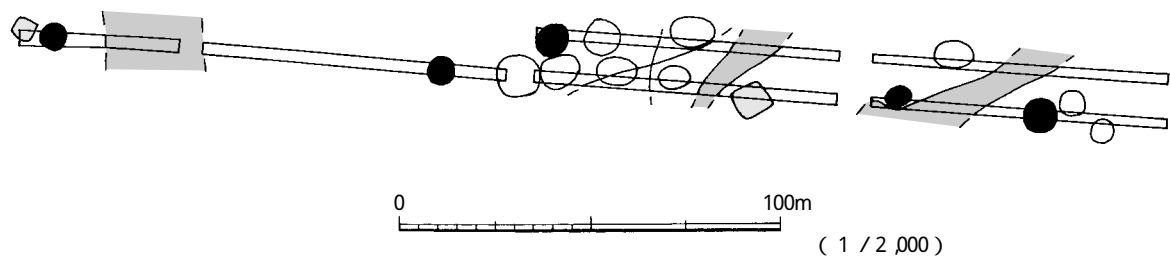




住居想定案

( 1 / 100 )

集落想定案



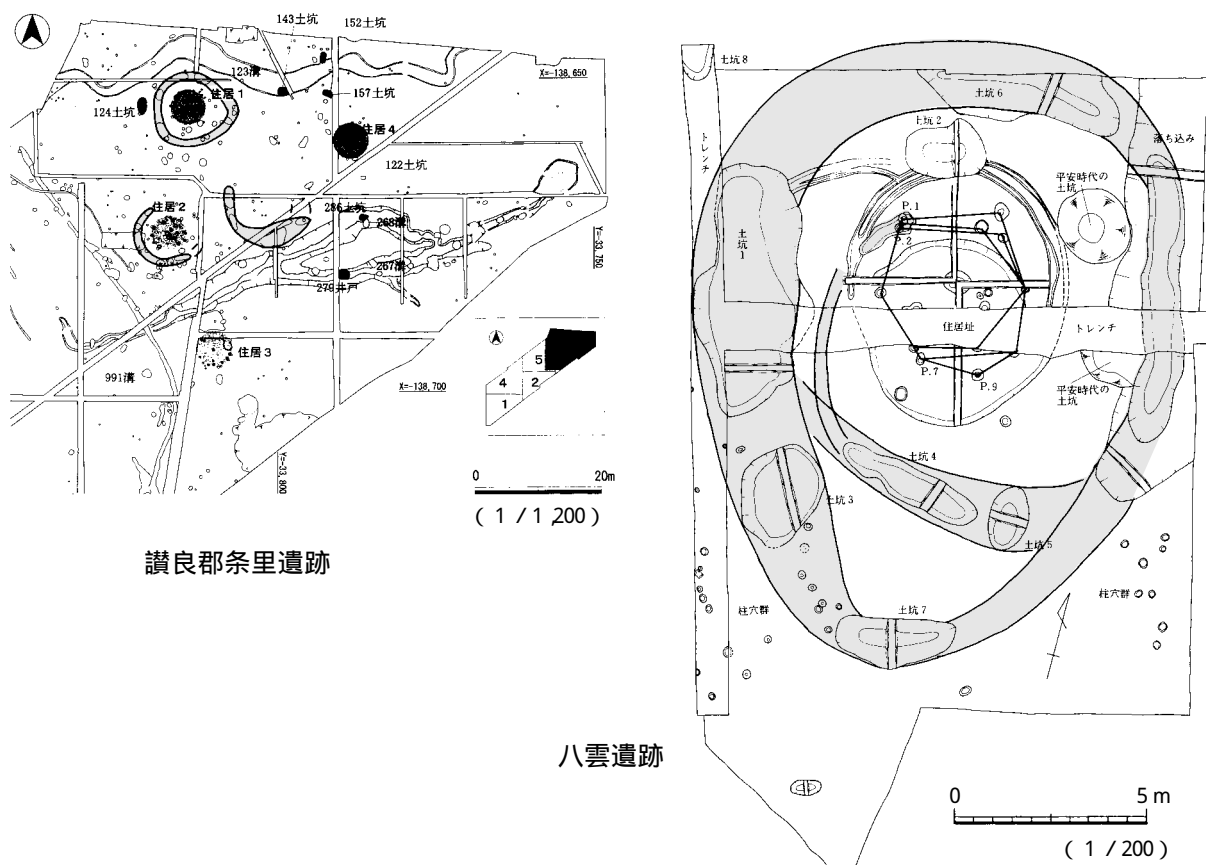
住 居

住居か方形周溝墓

周溝状遺構

鞍 部

第12図 作道遺跡の弥生住居 2



第13図 大阪府の弥生住居

は住居より新しい遺構であり、中央に棟持柱をもつ六本柱とされており、建替えが想定された。外側には土坑が存在し、玉造工房（竪穴）に伴う施設と認識（森田1990）されたが、周溝を持つ建物（久田1999・岡本2006）と思われる。土坑4・5は不整楕円形の周溝に交わる可能性と、土坑4とP1・2に伴う溝は共に浅い遺構なので、繋がって別（建替え）の周溝になる可能性もあろう。柱配置は六角形（岡本2006）が数パターンと七角形（A類）の可能性が想定される。

#### 8. おわりに

今回は、住居と認識された遺構の再検討と、建物と認識されていない遺構群を報告書の記述や写真を参考にして住居と認定することを主眼とした。及川良彦氏が関東地方の方形周溝墓の中には実は周溝を持つ建物があることを提案（及川1998）され、岡本淳一郎氏により周溝を持つ住居が全国的に集成（岡本2006）されて、全国的な認識が深まっていると思われる。しかし、幅が狭い調査では遺構の個別認識はされても、遺構群と認識されていない例が多い。また小さな柱穴を半截して深さや土層をしっかりと記録するが、遺構群のまとまりとして柱穴列や建物と認識して報告することを気にしていない報告もあるように思える。これらの疑問から、遺構群として認識する必要性を感じ、自分なりに想定復元した。しかし、復元はあくまでも筆者の想定であり、今後遺構群として認定されるかは各方面から検討していただきたい。本稿をまとめるにあたり、多くの方々から教示を得たので氏名を記して謝意としたい。敬称略、伊藤雅文、上野 章、及川良彦、金三津英則、田嶋明人、下濱貴子、林 大智、藤田慎一。

## 参考文献

- 荒井 隆 1997 『市内遺跡調査概報Ⅵ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆・山口辰一 1999 『石塚遺跡調査概報Ⅴ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆 1999 『市内遺跡調査概報Ⅸ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆 2004 『市内遺跡調査概報ⅩⅣ』 高岡市教育委員会
- 上野 章 1974 「弥生時代付古式土師器」『富山県史考古編』 富山県
- 岡田一広ほか 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡発掘調査報告』 高岡市教育委員会
- 岡本淳一郎 2006 「周溝を持つ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討 弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に」『青山考古第15号』 青山考古学会
- 金三津英則ほか 2006 『作道遺跡発掘調査報告』 射水市教育委員会
- 金山弘明 2002 『野本遺跡Ⅲ』 松任市教育委員会
- 木立雅朗ほか 1993 『野本遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 出越茂和 2002 「弥生時代後期から古墳時代初頭の村落」『大友西遺跡Ⅱ』 金沢市埋蔵文化財センター
- 中尾智行 2007 「讃良郡条里遺跡 集落と初期遠賀川」『近畿の弥生時代は底を打ったか?』 近畿弥生の会
- 西口陽一 1987 『八雲遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会(上・下)」『古代文化第53巻第5・6号』 古代学協会
- 久田正弘 1992 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『石川県埋蔵文化財保存協会年報3』 石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92号』 長野県考古学会
- 久田正弘ほか 2004 『猫橋遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 藤田慎一 2003 『石塚遺跡調査概報Ⅵ』 高岡市教育委員会
- 前田清彦 1995 『野本遺跡』 松任市教育委員会
- 松尾 実ほか 2005 「加茂遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第14号』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次・久田正弘ほか 2004 『穴口遺跡・穴口貝塚』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次ほか 2004 『東的場タケノハナ遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁 1998 『吉崎・次場遺跡第16次』 羽咋市教育委員会
- 森田克行 1990 「住まいと生産活動」『季刊考古学第32号』 雄山閣
- 安 英樹 2004 「北陸」『弥生中期土器の平行関係』 埋蔵文化財研究会
- 山口辰一 1987 『石塚遺跡調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1988 『石塚遺跡調査概報Ⅱ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1992 『市内遺跡調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1993 『市内遺跡調査概報Ⅲ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1995 『石塚遺跡調査概報Ⅲ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1996a 『石塚遺跡調査概報Ⅳ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1996b 「石塚遺跡、老子地区」『市内遺跡調査概報Ⅳ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1997 『市内遺跡調査概報Ⅴ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一ほか 1998 『市内遺跡調査概報Ⅶ』 高岡市教育委員会